

# アイルランドの現在とカトリック教会

キーワード: Ireland / Roman Catholic Church / John Boyne

三神弘子

## I. はじめに

アイルランドは、2015年5月22日に実施された国民投票で62%の賛同を得た結果(Iris Oifigiúil)、世界で初めて、憲法上同性婚を認める国となった<sup>1</sup>。同年10月29日には婚姻法2015(Marriage Act 2015)が制定(11月16日に施行)されたことによって、2015年中には、91組の同性カップル(男性47組、女性44組)が誕生している(CSO 2015)。ダブリンの大司教ディアミッド・マーティン(Diamuid Martin)は、この国民投票の結果を受け、「私は結婚や家族というものの本質について、ある強い信念をもっています。それは、教会の強い信念でもあります。結婚の定義を変えることなく、ゲイの男性たちやレズビアン女性の権利に対し、敬意が表されるようになると思っていますが、それはかないませんでした。しかし、それが、今日私たちが生きている世界なのです」と語っている(Ó Calloai)。アイルランドは長らく、国家とローマ・カトリック教会の密接な関係が、政策や法律にも影響を及ぼしている国として、法的に離婚を禁じ、避妊具の販売、使用を禁じてきた。現在、法改正を経て、離婚も避妊具の使用販売も認められるようになっているが、胎児の生存権は憲法で認められ、限られた例外的な状況を除き、中絶は未だに禁じられている。ローマ・カトリック教会の信者は、2011年の国勢調査において84%を占めており(CSO 2011)、アイルランドがカトリック国であることには間違いがない。それでも、同性婚をめぐる、教会の意向に反する結果が国民投票で導かれるアイルランド社会とはどのような社会なのか、そこで何が起きているのか、社会の変化をたどりながら考察していきたい。

## II. 国家と教会: ナショナリズムとカトリシズム

アイルランドとカトリック教会の関係について考えるためには、ヨーロッパの16世紀、宗教改革の時代にまで遡らなければならない。ヨーロッパ大陸でルターやカルヴァンが推進した宗教改革は、教会の世俗化や腐敗に対する<プロテスト>として、神学上の議論に基づいたものだったのに対し、1534年に英国王ヘンリー8世がローマ教皇と袂を別つことになった理由は主に政治的(さらには離婚を進めたいという個人的)なものだった。しかし、その動機がなんであれ、イングランドは、フ

ランスやスペインといったカトリックの強大国に対抗し、プロテスタント国家として自らを位置づけていく。この文脈において、アイルランドの宗教改革はイングランドのアイルランド政策の一環として、イングランドの宗教改革の経過とほとんど平行して進められることとなり、その結果、アイルランドのカトリック教会は次第に周縁に追いやられていったが、土地所有という観点から見ると、17世紀の前半までは、アルスター地方を除いてアイルランドの土地の大部分はカトリック教徒が所有していた。しかし、クromウェルの侵略(1649-50)後は、プロテスタントが土地のほとんどを所有するようになり、ボイン川の戦い(1690年)を含むウィリアム王戦争(Williamite Wars 1689-91)と呼ばれる一連の戦争の後、「比較的新しく入植したプロテスタントが、人口の圧倒的多数を占める先住カトリックを支配するという植民地的状況が成立した」(山本 437)<sup>2</sup>。プロテスタント・アセンダンシーと呼ばれる、こうした植民地的状況の中、1695年以降、断続的に導入されたカトリック刑罰法は、カトリックの神父を国土から追放し、信者から選挙権、被選挙権、また官職に就く権利などを奪ったが、アイルランドの大衆に対し、プロテスタントに改宗させるための大がかりな宗教迫害が実行されたわけではなかった。「4000人程度の土地所有階級は、アイルランド聖公会(アングリカン・チャーチ)に改宗した」(“Catholic Church” 561)が、アイルランド人の大多数は、アイルランド聖公会(アイルランドにおける独立のアングリカン教会＝プロテスタント)の信者に改宗することはなかった。歴史家 J. C. ベケットは刑罰法に関して以下のように述べている。

アイルランドの刑罰法は厳密な意味の宗教迫害とはみなしがたいもので、ローマ・カトリック信仰そのものの抑圧を目指すものではなかった。1703年に施行された法律は……高位聖職者や修道士の追放を目的として成立したが、強制的に施行されることはなかった。しかし、ローマ・カトリック教徒は信仰は認められたが、すべての政治力を除去されることになったのである。(ベケット 133)

実際、1716年頃から宗教的な礼拝に対する刑罰はほとんど行われなくなり、カトリック教会は次第に組織を立て直していった(Wall 249)。アイルランド聖公会(プロテスタント)のアーサー大司祭ベレズフォード(John George de la Poer Beresford, 1773-1862)は、死の間際に、「私が子どもだった頃、<アイルランド人>とはプロテスタントを指していたが、今ではローマ・カトリックを指すようになった」と書いている。歴史家のバートレットは、この一文を引用し、「ベレズフォードの一生の間に、アイルランドにおいてカトリック教徒がアイルランドという国と同一視されるようになった」ことを指摘している(Bartlett 516)。19世紀半ばに起こった大飢饉を経て、「集合名詞として、定冠詞のついた<アイリッシュ>という語はカトリック専有のものとなり」(516)、カトリックの信仰は、19世紀以降のナショナリズムと結びついていった。その後、1960年代に至るまで、カトリック教会は、制度上でも国民感情においても、国のアイデンティティを形成するのに大きな役割を担うようになる(Brown 16-18)。19世紀末から20世紀初頭にかけて合法的な自治運動(Home Rule)が推進されることになるが、特に1912年の第三次自治法をめぐって、北部アイルランドに住むプロテスタント系のユニオニストたちが、「アイルランドの自治はローマ・カトリック教会の支配(“Home Rule is Rome Rule”)」というスロー

ガンを掲げて彼らの懸念を表し、自治法に反対したことはよく知られている。イギリスから独立したアイルランドが、ローマ・カトリック教会との関係をより一層強固なものとしたとき、プロテスタントにとっては住みにくい国となるのではないかという彼らの懸念には、1922年の独立後、アイルランドがたどった道のりを考えるとき、十分根拠があったといえることができるだろう。

1922年の自由国成立直後に発布された憲法では、「良心の自由、職業と宗教的実践の自由は、公的秩序と倫理的視点から、すべての国民に保障されており、直接間接を問わず、ある特定の宗教の実践を推奨したり、逆に活動を禁止したり制限したりするような法律、また、宗教的信仰や宗教的地位が理由で、不利益が生じるような法律が制定されるようなことがあってはならない」ことが明記されていた(eISB, Constitution 1922)。とはいえ、カトリック教会が大きな発言権を持っていたことに変わりはなく、自由国成立後の10年間に制定された法律の多くは、紛れもなく教会の見解を反映するものだった。例えば、1923年の道徳観に悪影響を与える映画に対する検閲法、1924年のパブの営業時間を短縮化し、同時に営業許可数を制限することによってパブの総数を減少させた酒類販売法、1929年の出版物に対する検閲法などである。1925年には、下院でアイルランドでは離婚法を通過させないという動議が可決され、アイルランドでは事実上離婚が禁止された。また教会は、ダンス・ホールで男女が親しく接することを問題視し、強く非難し続けた。このように、アイルランド人の生活に関わる道徳的、倫理的側面をコントロールするような法律が次々と制定されていった(Bourden 270-71)。

自由国成立から10年後の1932年2月に実施されたアイルランドの総選挙において、エイモン・デ・ヴァレラ(Eamonn de Valera)率いるフィアナ・フォイルが第一党となり、同年3月には政権交代が実現する。その3ヶ月後の6月にダブリンで盛大に開催された国際聖体大会(Eucharistic Congress)では、フェニックス・パークのミサに100万人を超える信者を集め(O'Dwyer)、内外にアイルランドがカトリックの国であることを知らしめた。政権の座についたデ・ヴァレラが直ちに着手したのは、イギリス=アイルランド条約を無効化することであり、自由国憲法に代わる新しい憲法の準備にとりかかることだった。後にダブリン大司教に任命されることになるジョン・チャールズ・マクケイド(John Charles McQuaid)の協力を得て1937年に制定されたアイルランド国憲法の序文は、「最も聖なる三位一体の名において(In the Name of the Most Holy Trinity)」という、非常にカトリック色の強い言葉によって始められ、エールの国民は、「謹んで、我々の神聖なる主イエス・キリストに対する感謝の念を持つ」といった表現が続いている(eISB, Constitution 1937)。特に、カトリック教会の影響が強い条項として、家族について規定した第41条、宗教について述べた第44条があげられる。第41条では、家族はアイルランド社会にとって、第一義的で基本的な単位であり、「女性は家庭内での活躍を通して国家に貢献する<sup>3</sup>」旨が記され、「婚姻の解消を認めるいかなる法律も立法化されない(41.3.2)<sup>4</sup>」ことが明記されていた。また、第44条で、カトリックは<国教>であると明瞭に記されていないものの、「国民の圧倒的多数が信仰する宗教」として、「特別な地位(special position of the Roman Catholic Church)<sup>5</sup>」が与えられていた。また、1935年の法改正により、産児制限に関わるすべての用具・薬などの輸入、販売が禁止されることとなった。

中立を保ち続けたアイルランドでは「非常事態」と呼ばれる第二次大戦終了後も、カトリック教会

の高位聖職者たちは、「ダンス・ホールが悪の場であり、海外からの雑誌や書籍が危険な影響を与えることになる」(Bourden 275)といった発言を続け、カトリック教徒の子弟は、1967年になるまで、1592年にエリザベス1世によって創設された、プロテスタント色の強いトリニティ・カレッジ・ダブリンには進学することが認められなかった。

### Ⅲ. 過渡期のアイルランド(1):「非常事態」終結から1970年代まで

一方、世界的な視野で見ると、「第二次世界大戦が生んだあらゆる種類の根深い変化は、キリスト教会、とくにカトリック教会まで波及せざるをえなかった」(ダニエルー 214)。1958年にローマ教皇に選出されたヨハネス23世が召集した第二ヴァティカン公会議(1962-1965)では、教会の現代化(アジョルナメント)をテーマに多くの議論がなされ、教会の「現在の在り方への<自己批判>として、一種の内部検討が行われた」(ダニエルー 231)。また、こうしたカトリック教会内部から起こった現代化への動きに対し、当然のことながら反動的な動きも同時に生じてきた。

アイルランドで1960年代、70年代に起こった変化は、世界的なレベルにおいてリベラルな社会に向けての変化が進む中、教会の内部からの現代化が検討され、それに対する反動も起こったといった文脈の中でとらえることができる。1959年にデ・ヴァレラの後継者として首相の座に就いたショーン・レマス(Sean Lemass)は、経済政策上、大きな方向転換を行った。長く続いた経済不況と、イギリスに対する貿易依存からの脱却を求め、新しいアイルランド像が求められていく中で、ヨーロッパ経済共同体(EEC)への参加が検討されるようになる。3度の申請の後、1973年にはEECに加盟し、憲法第44条に記載されていた「国民の圧倒的多数が信仰する宗教」としての「ローマ・カトリック教会の特別な地位(special position of the Roman Catholic Church)」という一節は、第5次憲法改正により削除された。1932年に定められた公務員職に就く女性が結婚後は退職しなければならないという法律(Marriage Bar)も廃止され、「最高裁において、1935年に定められた避妊具の輸入販売を禁止する法律は違憲であるとみなされ、既婚者には産児制限の権利がある」ことも確認された(Maguire 356)。

過渡期にあったアイルランド社会は、ヨーロッパの基準を見据えながら、慣習に縛られることのない自由な社会へと少しずつ確実に変化し、「道徳・倫理面で均一の社会ではもはやなく、急速に多元化が進んでいった」(Girvin 81)。それでも、アイルランドがカトリックの国であることに変わりはなかった。「離婚」と「避妊」の問題が公の場でさかんに議論されるようになるが、合法化するまでにはいたらず、1960年代当時、圧倒的な影響力を持っていたダブリンの大司教マクウェイドは、「離婚は邪悪なもので、避妊も邪悪なものである。邪悪なものを認めることはできない」と述べている(Girvin 80)。1971年生まれの小説家ジョン・ボイン(John Boyne)は、彼の少年時代、教会がコミュニティでどのような力を持っていたか、以下のように回想する。

自分は司祭を助ける侍者で、カトリックの学校に通い、毎週日曜日にはミサに連れて行か

れた。……この時代に、自分たちの教区で教会との関わりがいかに重要だったか、強調しすぎることはないと思う。例えば、ミサに出ないような家族は、社会からあつという間に村八分にあうような時代だったのだ。(Boyne 2014)

ボインが、穏やかではあるが、否定的なトーンで回想しているのに対し、アルコール中毒患者のための更正施設「Cuan Mhuire 聖マリアの避難所」<sup>6</sup>を立ち上げた修道女シスター・コンシーリョのエピソードは、1970年代のアイランドのカトリック教会に対する、国民感情の肯定的な具体例として興味深い。アルコール中毒患者を社会復帰させるという目的遂行のために、専用の建物の必要性を感じたシスター・コンシーリョは、1972年に、頃合いのいい物件をオークションで見つけるとすぐに銀行に赴き、支店長に借金を申し入れた。何を担保にするのか、また、どうやって借金を返済するのかと問われると、彼女は、「聖母マリア様が担保です。そして、マリア様が返済の方法をお示しください」と答えたという。おそらくカトリック信者であった支店長は借金を承認し、修道女の言葉通り「聖母マリアの導きによって」借金は完済された(Welch 137)。アイランドの1970年代は、善良な目的のために、聖母マリアが「借金のカタ」として提案する修道女を銀行が信用し、その借金を認めることが可能だった時代なのである。

#### IV. 過渡期のアイランド(2):ヨハネ・パウロ2世の訪問から1990年代に至るまで

1979年の9月29日から10月1日にかけての3日間、ローマ教皇ヨハネ・パウロ2世がアイランドを訪問した。ダブリン、ドロハダ、ゴールウェイ、リマリック、ノックなど、各地で行われたミサに、総人口が340万人程度だった共和国において(CSO 1979)、合計270万人とも言われる人々が参加するという熱狂的な歓迎ぶりを見せ、アイランドという国が、1979年の時点で、変わらずカトリックの国であることを世界に示したのだった。この教皇のアイランド訪問は、70年代において、アイランドがリベラルな社会に向けて、大きく変化しようとしていたことと連動している。伝統的なアイランドの道徳観や価値観が、リベラルな風潮に呑み込まれないための努力の一環として、「カトリック教徒に対する、物質主義と世俗主義の侵食を食い止める、少なくとも、その速度を遅らせることを目的に」教皇は招聘されたのだった(Donnelly)。翌々年の1981年には、プロライフ(胎児の生存権を認め、中絶禁止を憲法に記載する)運動がスタートするが、その背景には、「ヨーロッパの法律がやがてアイランドの法律に取って代わることとなり、中絶を認める法律も外圧によって制定される可能性があることを、保守的な政治家たちや教会の指導者たちが懸念した」という要因がある(Maguire 335)。プロライフ運動の結果、1983年に実施された国民投票では、中絶禁止派が84万票対42万票の大差で勝利し、アイランド憲法には「母親の生命権同様、胎児の生命権を認める」ことが記入され、中絶は憲法によって禁止されることとなった。

アイランド人を「熱狂させ」、一見成功裏に終わったかのように見えるこの教皇の訪問も、時代を経るにつれ、その評価は激変する。訪問から20年後の1999年、『アイリッシュ・タイムズ』でマクギヤ

リーは、「ローマ教皇によるアイルランド訪問は失敗だったとみなすことが、今日の共通認識となっている」と述べた。そして、

彼の訪問の意図が、当時この国に押し寄せようとしていた〈汚れた現代の風潮〉をせき止めることにあったとしたら、(訪問が失敗だったという解釈に対し)異議を唱えることは難しい。教皇は、避妊具の文化や離婚、中絶といった事柄に対して抵抗する司教たちや忠実な信者たちの決意を強めることはできたかもしれないが、それは、結局無駄な努力に終わったのだった。(McGarry)

と続けている。教皇の権威により、1983年の国民投票の〈勝利〉をもたらすことができたかもしれないが、その権威が有効だったのは、ほんのわずかな期間のみだったのである。

国民投票の翌年、1984年には、「胎児(赤ん坊)の命と母親の命」の問題をめぐる、アイルランド社会を揺るがす二つの象徴的な事件が相次いで起こる。一つは「アン・ロヴェット事件」<sup>7</sup>と呼ばれるできごとで、1月31日、冷たい雨の中、ロングフォード州のグラナードという町にある教会の中庭で、聖母マリア像のすぐ傍に倒れている15歳のアン・ロヴェットと生まれたばかりの赤ん坊が発見された。子どもは既に死亡しており、ロヴェットも搬送先の病院で死亡した。映画監督のマーゴ・ハーキン(Margo Harkin)は、この事件について、以下のように述べている。

アン・ロヴェットは私たち皆に衝撃を与えた。15歳の少女に性的経験があり、たった一人で出産し、アイルランド女性のロール・モデルであった聖母マリア像の祠の傍で発見されたという事実は、少なくとも、思春期の私に大きな衝撃を与えた。(Sullivan 45)

事件に触発されたハーキンは6年後に制作・監督した映画『ハッシュャバイ・ベイビー』(*Hush-A-Bye Baby* 1990)は、1985年のデリー／ロンドンデリーを舞台に、望まぬ妊娠をしてしまった15歳の少女ゴレットティを主人公に据え、その背景にある北アイルランド紛争の問題を描いた作品である。ゴレットティは、アイルランド語の教室で知り合ったキアランと交際するようになるが、彼女が妊娠に気づいたとき、キアランは、過激派の活動に関与した疑いで逮捕されているため、相談することもできない。また、獄中の彼にアイルランド語で書いた手紙は没収されてしまう。こうした15歳の少女の苦境と混乱を描いた作品がRTÉで放映(1990年9月)されるとすぐに、ローカル紙『デリー・ジャーナル』に対し、読者の賛否両論が寄せられた。「私は、このような映画に対する嫌悪感を表明したいと思う」とか、「私たちの社会に〈下水〉が流れているのだとしたら、この作品はその汚物溜めである」といった批判に対し、「この作品の中で使われている言語は、このデリーという町の文化を反映していると思う。それは、女性たちが自分たちの肉体を誘惑する〈物体〉か、生産する〈物体〉として見なさざるを得ない文化であり、男性たちに、性的優越性を通して自分の男らしさをあきらかにすることを推奨するような文化なのである」といった作品の本質を理解し、擁護したものもあったと、ディッキンソンは報告している(Dickinson)。

ポーラ・ミーハン(Paula Meehan)もまたこの事件に触発され、「グラナードの聖母マリア像は語る(The Statue of the Virgin at Granard Speaks)」と題した詩を書いている。

私は動かなかった。

彼女を助けるために、指一本上げなかった。

天国との間を取り持つことも、

神の耳元で、心地よい言葉をささやくこともしなかった。

I did not move.

I didn't lift a finger to help her,

I didn't intercede with heaven,

Nor whisper the charmed word in God's ear. (Meehan 42)

一人称で語るミーハンの聖母は、1979年にノックで行われた説教の中で、ローマ教皇が聖母に向かって二人称で呼びかけたことと皮肉にも呼応し合う。ノックがカトリックの聖地として見なされるようになったのは、1879年8月21日に、聖母マリアの姿が聖ヨセフと福音伝道者ヨハネの姿とともに教区の教会の外壁に出現したとされることに由来しているが(Larkin 76)、1979年の教皇のノック訪問は、この聖母の出現から100周年の節目の年に該当していた。教皇は説教の中で、カトリックの信仰にとって、またアイルランドの伝統にとって、いかに聖母の存在が大きく重要なものか強調し、「あなたは女のなかで祝福されたかた、あなたの胎の実もまた祝福されています」(ルカ 1:42)という、ザカリアの妻エリザベツが聖母を讃えた一節を続けて二度繰り返している。そして、説教の最後の部分で、教皇は聖母に向かい、「私たちは、アイルランドの地を、母としての深い慈愛(motherly care)に満ちたあなたに委ねます」と直接語りかけている。教皇が二人称で語りかけた聖母自らの答えであるかのように、ミーハンの聖母は、「私は動かなかった」(John Paul II)と一人称で語っている。アン・ロヴェットが、冷たい雨の中、聖母像の傍らで出産し、息絶えながら、教皇の言う「母としての深い慈愛」を求めていたと仮定するならば、ミーハンの聖母像は、決してそれに応えることはなかったという痛烈なアイロニーが響き渡ってくる。聖母をロール・モデルとする文化の中で育ったロヴェットは、「女として」、母として「祝福される」ことなく死んでいったし、彼女の「胎の実」も祝福されることはなかったのである。

「アン・ロヴェット事件」から数ヶ月後に起こった「ケリー嬰兒死体遺棄事件」(The Kerry Babies Case)も、アイルランド社会を大きく震撼させたできごとだった。4月14日、ケリー州のキャハルサイヴィーンという海岸で、首が折られ、胸と首に28箇所もの刺し傷のある一人の嬰兒の遺体が発見された(McCafferty 1985-a, 8)。まもなく、<未婚の母>として娘を育てていた当時25歳のジョアンナ・ヘイズという女性が殺人容疑で逮捕される。彼女は4月の段階で、娘の父親と同じ既婚男性による第二子を妊娠していたのであるが、赤ん坊の姿が見当たらないという理由で、海岸で発見された赤ん坊を出産後に殺害したという容疑をかけられたのである。ヘイズは海岸の赤ん坊の殺害を一度は自白するが、死産した第二子の遺体が彼女の住む農場内で発見されたことによって自白の真偽

が問われ、結局無罪となった。海岸で見つかった赤ん坊の殺害者は未だに逮捕されていない。

ヘイズは無罪となったが、彼女の支援者たちが問題にしたのは、この事件をめぐる行われた裁判のあり方だった。本来なら個人的な事柄として、公に議論されるはずのない問題、例えば、「ヘイズの性的体験の歴史、生理の周期、避妊具の使用といった点」が裁判中、「露骨に、ある時は写実的な描写を含めて議論」された一方、捜査における警察の不手際は不問にされた (Maguire 348)。ヘイズ裁判は、「国家には、道徳的行為の是非を決定する権利があり、未婚で出産するという道徳的犯罪を犯した女性の生活と行動を捜査する権利があることを、暗黙裏に認めたのである」(352)。さらに、事件の捜査という名目で、警察が「近親相姦の複数例、独身の女性と関係をもっている既婚男性の複数例、妊娠しイングランドに渡ったが、その後戻って来た女性の一例などについて捜査し、強姦されたことを日記に書き記していた少女の両親や、トラベラー(アイルランドの漂白民)やヒッピーたちも捜査の対象となった」ことがあきらかになった (O'Toole 1985, 89)。1984年に立て続けに起こった、アン・ロヴェット事件とケリー嬰兒死体遺棄事件は、長い間、人々が信じていたはずの「聖なるアイルランド」が神話にすぎなかったという現実をアイルランド社会に対して突きつける結果となった。

その翌年の1985年は、「聖像が動いた」年として記憶されている。同年の夏、アイルランド各地で聖像が動いたという報告が相次いでなされた。コルム・トビーン (Colm Tóibín) は、この現象について、以下のように述べている。

1985年の春と夏、アイルランド共和国では数千人の人々が、聖母マリア像の前に集まった。そして、像が動いたとか、幻や空から射す光を目撃したと証言する人々が現れ始めた。……ケリー嬰兒殺害事件、ひどい天気、エア・インディアの事故、アン・ロヴェットの死、国の負債、国民投票をめぐる議論の中で明るみになった事実や対立、失業問題、北アイルランドのハンガー・ストライキ、ギャレット・フィッツジェラルドの政策の失敗、ローマ教皇の訪問によって引き起こされた素朴な信仰心、幸福への郷愁、調和、教会が信仰の問題からかけ離れ、公共の問題にまで口をはさみすぎるようになったという怖れ、単純な好奇心、人々がかつてないほど多くの罪を犯しているという実感などがその背景にあった。(Tóibín 7)

今日に至るまで、科学的説明がなされていないこの「動く聖像」という現象がどのような文脈で生じたのか、トビーンは当時のアイルランドで共有されていた心性を見事に要約している。そして、1990年に発表されたハーキンの映画『ハッシュパイ・ベイビー』では、二人の少女の反応を通し、当時の人々の心理的反応が見事に描き出されている。望まぬ妊娠をした15歳の少女ゴレットティは友人のディンキーとともに、北アイルランドと共和国の国境を越え、ドニゴール州のゲールタハト(アイルランド語を日常的に話す地域)の村にアイルランド語を学ぶために出かけていく。バスを降りた二人が村の境界に到着すると、そこに小さな聖母像の祠があり、少女たちはその前で足を止める。

ゴレットティ「北(アイルランド)では、聖像が動いたって聞かないわね。」



ディンキー「マリア様、素敵ね。」

二人は聖母に対し、素直に敬意を表しながら村に入っていくが、ホームステイを終えた後、帰路につく二人の態度は明らかに変化している。村でゴレットティはディンキーに自分の苦境を告白し、ディンキーは苦しむ友人に対し共感するが、問題を解決する糸口も見つからないまま、二人は家に戻らなければならない。そして、再び聖母像の前に立ったディンキーは「動くんじゃないわよ！」と言い放ち、二人は笑いながら立ち去っていくのである。ディンキーのこの挑発的な言葉が持つ意味は大きい。ゴレットティの苦しみに対し、聖母が何の役にも立たないことに気がついた二人は、ロール・モデルとしての聖母を「素敵」だと思ふ態度を捨て、聖像が動いても意味がないと言い切り、聖母に向かって歯向かう姿勢を示しているからである。

マクファーティは、＜動く聖像＞という現象を、「アイルランドにおける女性の性の問題、離婚、中絶をめぐる国全体が議論した、その直接の結果である」と見なしている (McCafferty 1985-b, 7)。バークも「[1984年は]アイルランド女性の地位が激変した30年の最後の年にあたる。聖母マリアの年であった1954年に、多くの聖母像が計画され、建立された。そして、1984年、女性たちは本当に動いたのだ」と述べている (Bourke)。バークが指摘するように、1980年代の半ば、アイルランドの女性たちは確かに動いた。その動きの中には、ハーキンの描く15歳の少女たちが、聖母に向かって「動くな」と挑発した言動も含まれている。少女たちも意志を持ったのである。それでも、1986年に行われた離婚の承認をめぐる国民投票は否決されたのだった。離婚は結婚の秘蹟に対する重要な罪であるとみなす国民が、まだ多数をしめていたのである。

## V. カトリック教会とスキャンダル

1990年、女性初の大統領としてメアリー・ロビンソン (Mary Robinson) が選出された。トリニティ・カレッジの法学部教授だったロビンソンは、大学選出の上院議員としての在任中 (1969-89)、一貫して離婚と避妊の合法化、また同性愛者の人権擁護のための活動を続けてきた<sup>8</sup>。そして、大統領として、避妊具を自由に使用する権利を認めた法律、さらに、同性愛を合法的なものとして認める法律に署名することとなった。ロビンソンは新しい国のシンボルとして、国民から圧倒的支持を受け、その在任期間中、支持率が90%を下ることはなかった (“Mary Robinson”)。女性大統領としてのロビンソンが肯定的で、リベラルな新しいアイルランドのイメージを具現化する一方で、1990年代に入ると、アイルランド社会はさらに大きく動くことになる。ホーガンはその変化を、以下のように総括している。

1973年から1974年にかけての全国調査によると、4人の内3人が、婚外での性交渉は間違っていると考えていたことが報告されている。一方、21歳から24歳までの男女を対象にした1997年の調査では、平均で13人と性交渉の経験があることが報告されている。1990年に

ダブリンのヴァージン・メガストアはコンドームを販売したという理由で500ポンドの罰金を科されたが、1999年にダブリンの政府は、コンドームの使用を促進するために50万ポンドを費やした<sup>9</sup>。ゴードン・ブラウン(Gordon Brown, 首相在任 2007-2010)は英国で首相になる可能性を高くするために結婚するの必要を感じたのに対し、バーティ・アハーン(Bertie Ahern, 首相在任 1997-2008)は、結婚をせずにパートナーと同居していることを公にし、彼女は「ファースト・レディ」として彼の国賓としての公式訪問に同行している。(Hogan)

アイルランド社会におけるこのような変化の要因が、1990年代になって次々に暴露されたカトリック教会のスキャンダルのみに限定されるということとはできない。20世紀末における若者の性行動のパターンの変化は、程度の差こそあれ、多くの西欧社会でみられるもので、ことさらアイルランド特有のものではないからである。それでも、アイルランドにおいて、道徳的規範のコントロールを行っていたカトリック教会に対する信頼が揺らいでしまったことが、一つの転換点になっていることも事実である。1992年には、エイモン・ケイシー司教が、アメリカ人女性との間に息子を一人もうけ、教会の資金を養育費、教育費に流用していたことが露顕する(Murphy, C.)。翌年にはダブリンの「歌う神父」として人気のあったマイケル・クリアー神父が、家政婦との間に息子二人をもうけ、長い間、家族同然の生活を送っていたことが、彼の死後明らかになる(O'Toole 2014)。カトリック教会における禁欲の掟を破ったケイシー司教とクリアー神父は、1979年に、ローマ教皇がアイルランドのゴールウェイで若者のためのミサを行った際、教皇がヘリコプターで到着するまでの間、「前座」として歌を歌い、その場を盛り上げていた当の二人だった。神父に禁欲を求めるカトリック教会の教義に反する行為として、アイルランド社会を大いに揺るがすこととなった、これらのスキャンダルは、二人の聖職者が人々から支持される存在であったゆえに、一層、社会にショックを与えることとなった。しかし、今日の視点で見た場合、成人男女が合意の上で子をなしたという行為が、それ自体罪深いものなのか、という問いが必然的に生じてくる。マーフィーは、「ケイシー司教の罪は、女性とその息子を見捨てたことであると言えるだろうが、その後、カトリック教会を覆うこととなる一連のスキャンダル(児童に対する性的虐待)に比べたら、許されるべき罪状」であると述べているし(Murphy, C.)、クリアーについてオトゥールは、

彼の同僚が、長年にわたって行ってきたことを世間が知っている今となつては、彼の「罪」は小さかったと言えるだろう。彼は、性的な関係性、父親になるという関係性から自らを隔てる教会の規則にのっとって生きることができなかつただけなのである。今日、ほとんどのカトリック教徒は、「それがどうした」と言うのではないかと思う。教会自身が、同じことを言う時期が確実に来ているのではないだろうか。(O'Toole 2014)

と述べている。今日、聖職者に対する禁欲の掟そのものを変えるべき時代に来ているとオトゥールは指摘している。とはいえ、スキャンダルが露呈した時点で、この二人の聖職者の「転落」の軌跡は、アイルランド社会におけるカトリック教会の影響力が、1979年の教皇の訪問を頂点とし、その後

急速に衰えた軌跡と相関していると考えられたのだった。

神父が子どもの父親になっていたというスキャンダルよりも、さらに罪は重いと多くの人々が認める、神父による児童に対する性的虐待<sup>10</sup>の事実も次々と明らかになっていった。この問題について、世間の注目を最初に集めたのは、1994年に74件の被害申し立てを受け、12年の懲役刑を言い渡されたブレンダン・スミス<sup>10</sup>のケースであると、2009年11月26日に公開された「ダブリン大司教区におけるカトリック教会に関する調査報告」(通称マーフィー・レポート)が報告している。1975年から2004年までの期間を調査対象とした720ページに及ぶ、この報告書によると、被害申し立てがされた中で、合計321件の性的虐待があったとされ、真偽が確定しないケースは59件だった(Murphy, Y. 6)。さらに、カトリック教会と国家が共謀し、聖職者が重大な犯罪を犯しているにもかかわらず、組織を守るために犯罪者を保護し、事実を隠蔽した点に問題があったと報告し、このような隠蔽は、1950年代から1960年代にかけて、マクェイド大司教の時代に既に確認されていたことが明らかにされている(Murphy, Y. 119)

アイルランドにおけるカトリック教会に対する信頼が、世界的なレベルで失墜してしまったという現実を象徴したニュースが、2014年に世界を駆けめぐった。日本でも、例えばCNNが2014年6月5日にオンラインで、「子ども800人の遺骨か」という見出しで、「アイルランドで未婚の母や子どもの収容施設」のあった場所から約800人の子どもの遺骨が見つかったとされる問題で、市民や政治家から実態究明を求める声が高まっている」と伝えたできごとである。推測が推測を呼び、インターネットを通じて、＜混乱＞が全世界に拡散したプロセスは以下の通りである。

(1)アマチュア地方史研究家の女性が、当該施設について調査した際、1925年から施設が閉鎖された1961年までの間、797件の死亡証明が確認できたのに対し、埋葬を証明した文書は1件だけだったため、彼女は、修道女たちが遺体を＜遺棄＞したのではないかという結論にいたった。(2)40年前、当時12歳だった少年二人がよく遊んでいた施設跡地の古い浄化槽そばに、コンクリート板が敷かれた場所があり、その下が空洞になっていたこと、そして、そこに多くの人骨が置かれていたのを見たことがあるとアイルランドのタブロイド紙(Irish Mail on Sunday)に語った。[証拠は見つからない](3)同タブロイド紙は(1)と(2)の内容を合わせて記事にした。[25 May 2014](4)英国版姉妹タブロイド紙が、ウェブ上(Mail Online)で、「閉鎖された未婚の収容施設における巨大な浄化槽墓に800人もの子どもの遺体収容」といったセンセーショナルな見出しで報道した。[25 May 2014](5)この報道を受け、同年6月になると、情報が全世界に拡散した(Barry 2014)。

この現象に関するノウルトンの解釈には説得力がある。

この浄化槽で遺骨が発見されたという恥ずべき物語の証拠はほとんど見つからない。一瞬のうちに数々の物語が全世界を駆けめぐることが可能にしたテクノロジーを別にして、この物語は、我々が既に知っている事柄に見事に適合したからこそ、このように世界中で反響を呼んだのである。この数年間、アイルランドは子どもに対する性的虐待などを含むスキャンダルに次ぐスキャンダルによって揺れに揺れてきた。＜集合墓地としての浄化槽＞は、そうした物語によくなじむのである。それが厳密にいつて事実であろうとなかろうと、いかにもありそ

うなことのように思えてしまうのだ。(Knowlton)

子どもたちの遺体を修道女が浄化槽に遺棄しているという、冷静に考えればありそうにない<物語>は、カトリック教会が世界的に信用を失った状況の中で<拡散>した。そして、『マグダレンの祈り』(2002)や『あなたを抱きしめる日まで』(2013)といった映画を観た観客にとっては、いかにもありそうなことのように見えてしまうということをノウルソンは指摘しているのである。前者は、未婚のまま出産した女性たちに<墜ちた女>という烙印を押し、強制的に洗濯女として労働を強いていたマグダレン・ランドリーの現実を描いた作品で、後者は、未婚のまま産んだ息子を、承諾もなくアメリカに養子に出された女性の苦悩を描いた作品であるが、どちらも、<意地の悪い>修道女たちが女性たちの苦しみに関与していたというイメージを、観客に植えつけることに成功しているのである。そして、これが21世紀の今日、世界がローマ・カトリック教会を見る眼差しだということでもある。

## VI. ジョン・ボイン『孤独の歴史』(2014)をめぐる

ジョン・ボインの9番目の小説<sup>11</sup>にあたる『孤独の歴史』(*A History of Loneliness*, 2014)は、アイルランド生まれのボインが初めてアイルランドを舞台にした作品で、「私は中年にさしかかるまで、自分がアイルランド人であることを恥だとおもったことはなかった」という一人称の一文で始められている(9)。「孤独の歴史」では、1972年、17歳で神学校に入学し、神父になったオドラン・イエイツを主人公に据え、オドランの同僚で、児童を性的に虐待したとして糾弾されるトム・カードルを配して、1964年から2013年までのアイルランド社会の変化が描き出される。一貫してオドランの一人称で語られるが、年代順に進行せず、2001年から始まり、1964年と2013年の間を、人間の記憶がそうであるように、自由に行き来する構成になっている。

ボインは、小説が出版された2014年のインタビューで、彼自身が10代で感じたカトリック教会と神父についての怒りを、以下のように述べている。

13歳の時私は、袖の中に金属の錘を埋め込んだ木製の杖をしのばせ、いつも持ち歩いているサディスティックな神父に教わるという不幸に見舞われた。彼は、その杖をエクスカリバーと呼んでいた。ひどくその杖でぶたれた結果、2週間も学校を休まねばならなかったこともあった。目の前で私が崩れ落ちる様子を見ながら、彼が喜んでいてのは明らかだった。別の神父は、「公平な裁判」を指導した。そこでは、何か違反行為を犯した一人の少年が(私自身であることも多かった)、クラス全員の前に引き出され、クラスメートによって尋問された結果有罪となり、むち打ちの罰を受けるために皆の前でズボンが脱がされるのだった。

思春期に入り独立心が芽生えてくると、私は教会に対し一層の敵意を感じるようになった。十代のゲイの若者として生きることは簡単なことではなかった。おまえは病気だ、精神的におかしい、電気ショックによる療法を受ける必要があるといったことを、前日、教室に入ろうとした

時、自分の身体をまさぐった当の人物から聞かされるのは、特にやりきれなかった。愛について説きながら憎しみを実践していたような彼らのせいで、私の青春は、そして私のような若者たちの青春は害され、その結果として、具体的に性的経験を持つようになったとき、実に不健康で困難な関係を築かざるをえなかった。彼らがそのことを自覚していたとは思えない。(Boyne 2014)

J. B. キーン(J. B. Keane)は、1920年代の宗教的生活を記録した写真を見ながら、「こうした場面を見ると、皆、純粹で幸福に見えるかもしれない。しかし、それは神話に過ぎない。アイルランドは、教会が運営する孤児院や少年院で虐待される子どもたちの叫び声を聞くことはなかったのだ」と述べている(BBC)。1920年代に「聞かれることのなかった子どもたちの声」は、ボインの例からもわかるように、1970年代においても、やはり、聞かれることはなかったのである。そして、ボインが少年時代に感じた、カトリック教会に対する敵意と怒りは、40歳を過ぎ、成功した作家となっても消え去ってはないことが彼の語り口から伝わってくる。しかし、『孤独の歴史』は、そうした敵意に基づいた、カトリック教会を弾劾する告発の小説ではない。

ボイン自身は、別のインタビューで、以下のように述べている。

私は、教会について批判的な言及に耳をかさず、教会を擁護し続けてきた人々が、この本を読んだとき、自分たちがしてきたことの意味について、自らの責任について考えてもらえるような本を書きたいと思っていました。また、常に教会を批判し続けてきた人々がこの本を読んだとき、実際には、その人生を信仰と神に捧げた善き人々も存在していることを知ってもらい、彼らが行ってきたことの価値を認めてもらえるような本を書きたいと思いました。一つの物語の両面を表現したかったのです。そして、〈悪い〉神父の孤独と悲劇と同様に、〈善い〉神父の孤独を意識したいと思っていました。(Martin)

作中、〈善き神父〉と言われているオドランは、1964年、9歳の時に、5人家族全員で訪れたウェックスフォードの海で、父親と弟を亡くしている。一緒に泳ごうと父親に誘われたオドランがその誘いを拒否したため、かわりに父親は弟のキャハルを連れて海に行き、二人は溺れて死ぬ。目撃情報によると、父親が息子の頭を水中に押し込み溺れさせた後、自らも海に沈んでいったように見えたという。将来に絶望した父親は、末息子を道連れに自殺を図ったのである。「なんという世界に我々は住んでいるのだろう。そして、何という危害を我々は子どもたちに与えているのだろう」とオドランは語っている(83)。ウェックスフォードでのできごとの直後、母親に「あなたには使命がある。神父になるという使命があるわ」(85)と告げられたオドランは、17歳で神学校に入学する。ボインは、「母親の使命(mother's vocation)」<sup>12</sup>というアイルランド特有の表現の背後に、長い間、本人の意志ではなく、家族の意志、多くは母親の意志によって神父になることを余儀なくされてきた青年たちの存在を指摘している。家族の中から神父を輩出することは、社会的に承認された〈野望〉だったのである(Interview NPR)。17歳という若さで、母親の意志に添う形で神学校に入学し、やがて神父に

なったオドランは、結果的にその環境に適応できた人物として描かれる。

その一方、作品中、＜悪い神父＞として、子どもたちへの性的虐待を繰り返すトム・カードルもまた、家族によって神父への道を強要された人物である。オドランとは異なり、彼はどうしても、神学校という環境に馴染むことができない。一度、神学校から逃げ出したトムが、父親に連れ戻された時、彼の目の周りには「緑色のあざ」があり、「打撲傷の痕は消えかかっていた」ことに、オドランは気づいている(206)。また、自分の父親が自殺したことをトムに告白したとき、「お前は幸運なやつだな。俺の親父も自殺してくれたらよかったのに」と言われたことを、オドランは記憶している(248)。さらに、トムが神学校の唯一の長所は、夜通しぐっすり眠れることで、彼が家にいた時は、「9歳になったときから神学校に入るまで、真夜中に父親に起こされるか、扉を開けて父親が入ってくるのではないかという恐れのため、自分から起きてしまうかのどちらかだった」と語ったことを思い出す(248)。ここで示されているのは、トムが性的虐待を繰り返す加害者であると同時に、自分の父親から暴力的虐待、さらには性的虐待を受けていた被害者でもあったという事実である<sup>13</sup>。もちろん、トムが被害者であったことで、彼自身の罪が赦されるわけではないとしても、そこには、加害者の多くは被害者であったという、アイルランド社会が長い間隠してきた闇があることをボインは暗示している。

トムの友人として、長い年月の間、その犯罪行為を身近で見ているはずのオドランは、小説の語り手として、その犯罪を自覚的には語らない。彼は自分が見聞きし、与えられていたはずのさまざまな手がかりを無視し、トムの問題をはっきりと認識しようとはしないのである。その結果、オドラン自身もある意味で＜共犯者＞になってしまうが、その事実すらも彼は＜認識＞できない。そして、目にしたことを断片的に語りながら、全体像を自覚的に見ようとしないうえ、彼は曖昧で、＜信頼できない語り手＞になっていく。例えば、トムに性的暴行を受け、すっかり性格も変わってしまった妹ハナの長男であるエイダンについて、オドランはあくまでも客観的な描写を貫いている。オドランの母親の死に際し、彼とトムは、葬儀のミサを共同であげるが、ハナは遠方から来てくれたトムに感謝し、オドランの宿舎で寝袋に寝るかわりに自分の家に泊まっていくように勧める。ハナの家を一人で退出するにあたって、オドランは、「これが、あの快活なエイダンを目にした最後だった。私が1週間か2週間後に彼らの家を訪ねたとき、彼は全く別の少年になっていた」としか語らない(353)。そして、その夜、自身の甥に起こったできごとには目をつぶり、トムを一人残して立ち去ったことに対する自らの責任を問うことはないのである。

また、一人の少年の自殺についても、オドランは間接的にはあるが関与している。教区神父としてウェックスフォードに赴任していたトムを訪ねたオドランは、ブライアンという少年が、夜闇にまぎれてトムの車のタイヤをナイフで刺し、パンクさせているのを目撃する。そして、「私はベッドに戻った。どう考えたらよいか、わからなかった」と語る(299)。このブライアン少年は、トムの被害者で、その幼い報復手段として、タイヤをパンクさせるという行為にでたのだったが、オドランは、少年が首をつって自殺したという事実を、15年後、トムの裁判を傍聴に来た彼の母親によって知らされる(396)。そして、刑務所から出所したトムと最後に対峙した場面で、ブライアンの行為を警察に報告したのはオドランであり、ブライアンの自殺はこの警察の介入が引き金になった可能性がトムによって示唆

される。ここでも、語り手オドランは、事実と直面することをトムに強要されるまで、自分の〈責任〉を認めることができない。

トムが短期間に教区から教区へと移動させられていた事実は、カトリック教会が、彼の犯罪を知っていながら、それを組織的に隠蔽しようとしていたことを物語っているが、〈善き神父〉であったはずのオドランも、無意識のうちにトムの犯罪を隠蔽することに荷担し、かつ、彼自身の責任を問われる立場にあったのである。小説の最後、語り手オドランは、遂に、自分もまたトム同様、有罪だったと言えるのではないかという結論にいたる。

私は、その始まりからすべてを知っていた。そして、何もしなかった。自分の意識からすべてを締め出し、目の前で展開する事態を認識することを、何度も何度も拒絶してきたのである。はっきりと口に出して物言うべきときに、何も言わなかった。自分はより高い人格者だと信じて。私は、彼らの犯罪のすべてに関わる共犯者だ。そして、自分のせいで人々は苦しんできた。私は自分の一生を無駄にしてきた。その一瞬一瞬を無駄にしてきた。そして、皮肉なことに、有罪の判決を受けた一人の小児性愛者によって、私自身、彼らと同様に有罪であるということが示され、それに対し、私は何も言うことができなかったのだ。(471)

真実を見ようとせず、具体的に行動を起こすこともなかった、〈善き神父〉による自己に対する断罪で小説は終わっている。そして『孤独の歴史』という小説は、読者に対し、そのようなオドランを糾弾できる資格が〈あなたたちに〉あるのかという強烈な問いを投げかける。〈あなたたち〉もまた、「自分はより高い人格者だと信じて」、安全な立場からこの小説を読み続けてきたのではなかったかと。筆者はこの作品を2度通読したが、語り手のオドランがさまざまな形で残している〈手がかり〉に、2度目に読むまで気がつかないことが少なからずあった。オドランが見るべきものを見過ごしたように、〈注意散漫な〉読者として、そこに書かれているものを読んではいるはずなのに、その意味を認識していなかった、いや認識できなかったのである。

小説が扱っている1964年から2013年という時代を生きてきた人々の中で、カトリック教会に巣くう問題を直視し、「はっきりと口に」してきた〈慧眼の〉人々も少なくなかったことは事実である。しかし、日々の生活に流される中で、オドラン同様、現実を見ようとしなかった人々も、同様に少なくなかったのではないかとボインは問いかける。巧みなストーリーテラーであるボインが語る物語、1964年から2013年までのアイルランドの精神史を夢中になって読み進むうちに、読者が小説のページに書かれている手がかりから目を逸らしてしまうことと、オドランが目の前の現実を認識できなかったことは互いに相関する。この相関関係を意識することで、読者が感じる、児童に対し性的虐待を行う神父たちに対する嫌悪感の先に、何か別のものを見る必要があるという問題提起がされているように思う。そしてボインは、読者に対し、呆然として我を失うオドランに共感すること、「自分はより高い人格者」であると思いきまないと求めているのである。

## Ⅶ. 結びに変えて

アイルランドにおける、国家とカトリック教会の関係がいかに変遷してきたかについて概観してきた。カトリック教会が社会に対する影響力を失った現在、多様性を尊重するリベラルな社会を標榜する国家として、ほとんどの問題が「解決」されたと言える。唯一残されたのが中絶の問題である。1983年に、国民投票を経て、胎児の生存権を認めることが憲法に記載され、中絶が禁止されて以来、アイルランドは中絶問題をめぐって国民投票を重ねてきた。1992年に、14歳の少女が強姦され妊娠するという事件が起こった(X ケース)が、両親は英国で中絶手術を受けさせることを決断し、出発に際し、強姦事件の証拠として、胎児の組織の一部が必要かどうかを警察に問い合わせた。そのため、事件が検事総長の知るところとなり、中絶中止の仮命令を執行した。驚いた少女と両親は、急遽、アイルランドに帰国した。その後、高等法院が、少女に対する中絶中止命令を承認し、以後、9ヶ月間アイルランドを離れることを禁じた。両親が最高裁に上告した結果、少女が自殺の危機にあるという点が指摘され、少女の生命を救うことが優先され、高等法院の判断は破棄された。これを受け、プロライフ運動グループとカトリック教会が中絶の完全禁止を求め、国民投票が実施された。その結果、胎児の生存権を憲法から削除することは否決されたが、母親が海外に渡航する権利を阻むものではないこと、また、そのための情報を得ることをさまたげないことが承認された。

2002年には、「妊娠時における人命保護法 2001」をめぐり、(1)妊婦が自殺の危険性があるという理由で中絶を認めることを廃止する。(2)「中絶とは、女性の子宮内で生を受けた胎児を、どのような手段であれ、意図的に殺害するものである」と新たに定義づけ、それは犯罪行為であるとする。(3)母体を救うために必要な医療プロセスを、犯罪行為である中絶とは区別する、という3点について可否を問う国民投票が行われ、否決された(“Information Booklet”)

2012年10月、ヒンズー教信者であるサヴィータ・ハラパナヴァールがゴールウェイの大学病院で死亡した。彼女は流産しかかっており、医者から子どもの生存は望めないと言われたが、胎児の心音が聞こえている間は、中絶ができないと判断された。入院中の3日間、彼女は中絶を訴え続けたが、担当していた産婆に「ここはカトリックの国だから」と言われたことも、後に問題視されることになる。24日、女兒を死産した後、サヴィータ自身も死亡した。この事件は、世界的にも大きな衝撃を与えることになったが、アムネスティ・インターナショナルは、アイルランドの厚生大臣に対し、「サヴィータの悲劇的な死は、最も基本的な人権、つまり、母体の生命が危機に瀕している際に中絶を受ける権利に関するアイルランドの法律と政策において、大きな欠陥があることを示している」という旨の文書を書き送った(“Irish Govt”)。その後、アイルランド政府は、アイルランドにおいて中絶が合法的に実施される条件を制定した「妊娠時における人命保護法 2013」を下院、上院に提出し、2013年7月30日にマイケル・D・ヒギンズ(Michael D. Higgins)大統領によって署名され、2014年1月1日から実施されることとなった。とはいえ、この法案は、1992年のXケースの際に行われた国民投票の結果を再確認したにすぎず、女性の中絶を選択するという権利が認められたわけではない。アイルランドでは、未だに中絶は違法である。事件直後に、サヴィータの家族や友人たちからコン



タクトを受け、精力的に取材を続けてきたホランドは、「問題の核心は、中絶を遂行すべきであるという決定を下す権限を誰が持っているのかという点である。アイルランドで、自分自身が中絶を容認することになるとは夢にも思わなかった多くの人々も、本能的にある考えを持つにいたったと思う。これは、サヴィータがなすべき決定だった。彼女の意志は尊重されるべきだったのだ。その選択肢を持つことは、女性の権利なのである」と述べている(Holland 263)。

中絶の問題は、単に女性の権利の問題として片付けられない難しさがある。サヴィータの例に見られるように、法を犯してはならないという理由で、病院関係者が取った硬直した対応が望ましいものではなかったと理解しつつも、その行為が一個の命を奪うものであるということを容認できない人々も、未だに少なくはない。同時にまた、1980年から2015年にかけて、「少なくとも、165,438名の女性たちが、イギリスに渡り中絶を受けた」(ifpa)ことも事実なのである。

## 注

本稿は、2015年9月12日、愛知淑徳大学英文学会において行われた講演に加筆し、構成し直したもので、科学研究費基盤研究(C)(課題番号 15K02364)による研究成果の一部である。

- <sup>1</sup> 法律によって同性婚を認めたのは2000年のオランダが世界初であるが、国民投票を経て、憲法上で同性婚を認めたのはアイルランドが世界初である。2010年には、“Civil Partnership and Certain Rights and Obligations of Cohabitants Act 2010”により、同性同士の内縁関係が法的に認められ、その権利は保証されていた。
- <sup>2</sup> 1600年の時点では、カトリック教徒は国土の90%以上を所有していた。(12世紀以降、宗教改革以前にアイルランドに入植したアングロ＝ノルマン人は、当然カトリック教徒として位置づけられる。)クロムウェルの侵攻以降、カトリックの土地所有率は漸次減少の一途をたどり、1688年の段階では22%、1703年には14%、18世紀の間には5%にまで減少する。
- <sup>3</sup> 1932年に導入された法律で、結婚した女性は公務員の職を辞さなければならなかった(Marriage Bar)。
- <sup>4</sup> 1995年における第15次憲法改正により、この一節は削除された。
- <sup>5</sup> 1973年における第5回憲法改正により、この一節は削除された。
- <sup>6</sup> この組織はその後にも発展を続け、現在では南北アイルランドに8つの施設を設け、中毒患者の社会復帰の手助けを行っている。
- <sup>7</sup> 『サンデー・トリビューン紙』がこの事件を報道する際、実名報道にするか、匿名報道にするか、慎重に議論が重ねられた。「アン・ロヴェット事件」について特集したRTÉの番組は、「もしも実名で報道されていなかったら、彼女の物語が人々の心をあれほどまでに動かすことはなかったのではないかと解説している。(RTÉ. ‘Ann Lovett: The Story That Wouldn’t Remain Local.’ 27 Sept. 2004.)
- <sup>8</sup> 1969年に上院議員に選出された旧姓メアリー・バークは、1970年、離婚と避妊を禁じる法律が狭量なものであると主張し、避妊法を改正する法律を上院に提出しようとしたが、フィアナ・フォイル政府は彼女の主張を退け、また野党のフィネ・ゲール党、労働党も、彼女を支持しようとしなかった(Girvin 82)。
- <sup>9</sup> 1981年にエイズ患者がアメリカで初めて報告されて以来、1980年代から1990年代にかけて、コンドームを使用し

たセーフセックス・キャンペーンが世界的に推進された。アイルランド政府のこの動きも、エイズ感染防止という側面が大きい。

- <sup>10</sup> カトリック教会の神父による児童に対する性的虐待は、アイルランドのみに限った現象ではない。アメリカの『ボストン・グローブ』紙は、2001年に、ボストンとその周辺地域で起こっていた、神父による性的虐待に関する問題を告発した。告発にいたるまでのプロセスは、その後、映画『スポットライト 世紀のスcoop』(2015)で描かれることとなった。映画の公開にあたり、ヴァチカン放送のコメンテーターは、映画を<正直>で称賛すべきである>とし、『ボストン・グローブ』の報道が、アメリカ・カトリック教会が「罪を受け入れ、それを公に認め、すべての責任をとる」ことを促したと述べた。また、教皇フランシスコは、この問題について真摯に取り組む意志を表明している(Allen)
- <sup>11</sup> ボイン自身のウェブサイトでは、「小説」と「若者向けの小説」にカテゴリーが分けられていて、9冊の小説の他に、5冊の若者向けの小説が挙げられている。
- <sup>12</sup> 1950年代の時代を切り取11シーンとして、「新たに叙階を受けた神父が、メイヌースで初めての祝祷を実母に対して行」っている写真が収録されている。誇らしげに息子の前に跪く母親と若い神父の周りを、微笑みながら、やはり誇らしげに見つめている親族の姿が映し出されている(Lensmen 91)。
- <sup>13</sup> 2016年5月には、ウォーターフォードに住む66歳のイギリス人の父親が、息子が6歳の時から定期的な性的虐待を加えていたという罪で逮捕され、10月には懲役14年という判決を受けたというニュースが報道された。このように、家庭内で父親が、男女を問わず実子に性的虐待を継続的に加えるという犯罪は、アイルランドでは時折見られ、裁判の結果が数多く報告されている。

## 引用文献

- Allen, Jr. John. L. “Vatican Radio Praises Movie on Boston Globe Coverage of Clergy Abuse.” *Crux* 23 Oct. 2015. Web. 31 Oct. 2016.
- Bartlett, Thomas. “The Emergence of the Irish Catholic Nation, 1750–1850.” *The Oxford Handbook of Modern Irish History*. Ed. Alvin Jackson. Oxford: Oxford UP, 2013. 517–43. Print.
- BBC. “Irish Journeys.” 1999. Television.
- Bourden, Patricia. *The Emergence of Modern Ireland 1850–1966*. Dublin: Folens, 1986. Print.
- Bourke, Angela. “Silence in Two Languages: Nuala Ni Dhomhnaill and the Unspeakable.” Harvard University, Cambridge, MA. 18 March 1993. Lecture.
- Boyne, John. “The Catholic Priesthood Blighted My Youth and the Youth of People Like Me.” *Irish Times* 7 Nov. 2014. Web. 31 Oct. 2016.
- \_\_\_\_\_. *A History of Loneliness*. London: Doubleday, 2014. Print.
- Brown, Terence. *Ireland: A Social and Cultural History 1922–2002*. London: Harper Perennial, 2004. Print. (テレンス・ブラウン『アイルランド: 社会と文化 1922～85年』大島豊訳、国文社、2000)
- “Catholic Church in Ireland, the.” *New Catholic Encyclopedia*. 2nd ed. Vol.7. Detroit: Gale, 2003. 553–69. Print.

- Central Statistics Office (CSO). "Database, 1979." Web. 31 Oct. 2016.
- \_\_\_\_\_. "This is Ireland, Highlights from Census 2011, Part I." Web. 31 Oct. 2016.
- \_\_\_\_\_. "Marriage and Civil Partnerships, 2015." Web. 31 Oct. 2016.
- Dickinson, Margaret, Anne Cottringer and Julian Petley. "Hush-a-Bye Baby." *Vertigo* 1.1 (1993). Web. 31 Oct. 2016.
- Donnelly, James S. "A Church in Crisis: The Irish Catholic Church Today." *History Ireland* 8.3 (2000): 12-27. Web. 31 Oct. 2016.
- Electoric Irish Statute Book (eISB). "Constitution of Ireland." Web. 31 Oct. 2016.
- \_\_\_\_\_. "Constitution of the Irish Free State (Saorstát Eireann) Act, 1922." Web. 31 Oct. 2016.
- Frears, Stephen, dir. *Philomena*. Weinstein Company, 2013. Film. (『あなたを抱きしめる日まで』)
- Harkin, Margo, dir. *Hush-A-Bye Baby*. Channel 4 Television Corporation, 1990. Film.
- Hogan, Goretti. "Changing Women's Lives in Ireland (Part 1)." *International Socialism* 91 (2001). Web. 31 Oct. 2016.
- Holland, Kitty. *Savita: The Tragedy That Shook a Nation*. London: Transworld, 2013. Print.
- "Information Booklet: Twenty-fifth Amendment of the Constitution (Protection of Human Life in Pregnancy) Bill, 2001." Referendum Commission. Web. 31 Oct. 2016.
- Irish Family Planning Association (ifpa). "Abortion in Ireland: Statistics." Web. 31 Oct. 2016.
- "Irish Govt Must Clarify on Abortion Issue: Amnesty." *Times of India World* 17 Nov. 2012. Web. 31 Oct. 2016.
- Iris Oifigiúil. "Thirty-fourth Amendment of the Constitution (Marriage Equality) Bill 2015." 26 May 2015. Web. 31 Oct. 2016.
- John Paul II. "Visit to the Shrine of Knock (September 30, 1979)." John Paul II Foundation. Web. 31 Oct. 2016.
- Knowlton, Steven. "Why Australia's Media Bought the 'Irish Babies in the Septic Tank' Story." *Crikey* 13 June 2014. Web. 31 Oct. 2016.
- Larkin, Emmet. *The Historical Dimensions of Irish Catholicism*. 1976. New York: Arno P, 1984. Print.
- Lensmen Photographic Archive. *The 1950s: Ireland in Pictures*. Dublin: O'Brien P, 2012. Print.
- Maguire, Moira J. "The Changing Face of Catholic Ireland: Conservatism and Liberalism in the Ann Lovett and Kerry Babies Scandals." *Feminist Studies* 27.2 (2001). Web. 31 Oct. 2016.
- Mahon, Evelyn. "Kerry Babies Case." *The Encyclopedia of Ireland*. Ed. Brian Lalor. New Haven: Yale UP, 2003. 585-86. Print.
- Martin, Rachel. "History of Loneliness Explores the Complexity of Priest Sex Abuse." NPR 24 Hour Program Stream. Web. 31 Oct. 2016.
- "Mary Robinson." *New World Encyclopedia*. Web. 31 Oct. 2016.
- McCafferty, Nell. *A Woman to Blame: The Kerry Babies Case*. Dublin: Attic P, 1985-a. Print.
- \_\_\_\_\_. "Virgin on the Rocks." *Seeing is Believing: Moving Statues in Ireland*. Ed. Colm Tóibín. Pilgrim: Mountrath, 1985-b. Print.
- McDonald, Henry. "Irish Church and Police Covered Up Child Sex Abuse, Says Report." *Guardian* 26 Nov. 2009.

- Web. 31 Oct. 2016.
- McGarry, Patsy. "Pope's Visit Didn't Stem Church's Ebbing Tide." *Irish Times* 2 Oct. 1999. Web. 31 Oct. 2016.
- McWilliams, David. *The Pope's Children: Ireland's New Elite*. Dublin: Gill and Macmillan, 2005. Print.
- Meehan, Paula. *The Man Who Was Marked by Winter*. Oldcastle, County Meath: Gallery Books, 1991. Print.
- Mullan, Peter, dir. *The Magdalene Sisters*. Miramax, 2002. Film. (『マグダレンの祈り』)
- Murphy, Colin. "Eamon Casey: Opening the Floodgate of Scandal." *Politico: Social & Political Issues* 26 Jan. 2006. Web. 31 Oct. 2016.
- Murphy, Yvonne. *Commission of Investigation: Report into the Catholic Archdiocese of Dublin* July 2009. Web. 31 Oct. 2016.
- "My Dark Fathers." *Irish Journeys*. BBC. 2 January 1999. Television.
- Ó Calloaí, Éanna. "Ireland Becomes First Country to Approve Same-sex Marriage by Popular Vote." *Irish Times* 24 May 2015. Web. 31 Oct. 2016.
- O'Dwyer, Rory. "On Show to the World: The Eucharistic Congress, 1932." *History Ireland* 15.6 (2007). Web. 31 Oct. 2016.
- O'Regan, Michael. "The Case of the Kerry Babies." *Irish Times* 12 April 2014. Print.
- O'Toole, Fintan. "Seeing is Believing." *Seeing is Believing: Moving Statues in Ireland*. Ed. Colm Tóibín. Pilgrim: Mountrath, 1985. Print. 89-95.
- \_\_\_\_\_. "Why Is the Story of Fr Michael Cleary Still the Subject of Denial?" *Irish Times* 1 July 2014. Web. 31 Oct. 2016.
- Sullivan, Megan. "From Nationalism to 'Baby X.'" *Eire-Ireland* 32.2-3 (1997): 40-51. Print.
- Tóibín, Colm. Introduction. *Seeing is Believing: Moving Statues in Ireland*. Ed. Colm Tóibín. Pilgrim: Mountrath, 1985. Print.
- Wall, Maureen. "The Age of the Penal Laws (1691-1778)." *The Course of Irish History*. 1967. Ed. T. W. Moody and F. X. Martin. Dublin, Mercier P, 1994. Print.
- Welch, Robert Anthony. *Kicking the Black Mamba: Life, Alcohol & Death*. London: Darton, Longman and Todd, 2012. Print.
- CNN Online. 「子ども 800 人の遺骨か 修道院関連施設で発見 アイルランド」 5 June 2014. Web. 31 Oct. 2016.
- ダニエルー, J. 他『カトリック 過去と未来』朝倉剛、倉田清訳、ヨルダン社、1981. Print.
- ベケット, J.C. 『アイルランド史』藤森一明、高橋裕之訳、八潮出版、1972. Print.
- 山本正. 「イギリス史におけるアイルランド」『イギリス史』川北稔編、山川出版、1998. 414-60. Print.